

名誉館長館話実施報告抄

新 野 直 吉*

山下太郎 今野賢三 大山幸太郎 川村文子 武藤鉄城 小松耕輔

はじめに

平成12年度は、前年度までの「館長館話」に引き続き「名誉館長館話」として、「先覚記念室」「菅江真澄資料センター」に因み12回行った。

その中から、6月9日（金）山下太郎・6月30日（金）今野賢三・7月7日（金）大山幸太郎・7月21日（金）川村文子・8月4日（金）武藤鉄城・8月18日（金）小松耕輔の各回について、「館話」の内容を文章化して報告するものである。

山下太郎

明治22年(1889)4月9日（17日や24日説もある）東京生まれ、父正治・母みつの長男であるが、直後に平鹿郡大森村の祖父太惣吉・祖母ひさの許で育てられ、父正治と祖父の養子九助の弟という形で戸籍に記載された。父は大森村の役場に務め才能を発揮していた。祖父も役場勤めだったが、楠正儀の子孫と伝える名族自負の故か、皆に振舞うことが好きで、家計崩壊し家屋敷も当時で30円の借金のかたになった。志を立てた正治は16歳で海路横浜に出「天下の糸平」田中平八商店に勤め、商売を学び独立した。太郎の母みつは岐阜県出身の近藤氏の出で、その家は本来笠松城主岩佐氏の後裔だが明治維新时期に近藤を称したという。次弟新三郎はこの母方の近藤家で育ち、50歳代まで生存したというが、三弟・四弟は夭折したこともあり、大森小学校に明治28年(1895)入学し後に横手小学校に転じていた長男太郎を父は上京させ、薬研堀小学校に入れた。五弟の近藤釜次郎は里子に出されており、父母が引き取ろうとしたが里親が渡さなかった。それを学生だった太郎が巧みに里親から連れ戻すことに成功したという。

明治35年(1902)慶應義塾普通部に進学した太郎は、剣道に精進し、「不惜身命」という理念を信

条とするようになった。39年秋札幌農学校に進学し、偶然秋田県人田所哲太郎青年と船に同乗して渡道、終生心を通わすこととなる。東京での関係でキリスト教青年会の青年寄宿舍に入寮。明治9年から10年にかけて8ヶ月しか在任しなかった初代教頭クラークの遺風漂う学校は若い野心に合った。寮の規則は厳しく禁酒禁煙だが人道主義で恋は自由だった。紫の矢絣の女学生の恋人を得、寮に遊びに来るまでの仲になったが、女性の親が娘を引離して失恋した。その為秋田県人会で痛飲してしまい、退寮させられ下宿住いになった。痛飲の店で恋人に似たお雪という女中を知り愛したが、彼女に身の上が違いすぎると論されてしまう。農学校は明治40年東北帝国大学農科大学になり、彼は42年(1909)農科大学農芸学科を卒業した。大正7年になると北海道帝国大学に官制が改まる。

卒業後軍隊に入るが、聯隊には普通部での級友が中尉で勤務していたのを、兵卒の分際で友達扱いしたので古参兵に鉄拳を受け、眼を悪くする。尊大なインテリ振りが嫌われる。大言壮語の兵士は軍隊に合わない。1年ほどで除隊してしまう。

身を寄せた横手の義兄山下九助の菓子店で、餅菓子作りの炊爨の吹き出し糊からオブラート発明のヒントを得て、連名で「完全食料紙製造法」の特許を大正2年に取り、東京深川に翌年(1914)白石元次郎と「山元商会」を開き、実業家の第一歩を踏み出し弟釜次郎にも手伝わせ、森永製菓の飴類を包むオブラートを納めるようになる。

世界大戦が勃発8月下旬日本が参戦した為独乙から特産の硫安が輸入できなくなる。太郎は八方情報を求め大工原東大教授の確認によって、米国にも白くはないが硫安があるとわかり、それを輸入する世界を視野に入れた貿易業に乗出す。大正5年(1916)28歳の彼に森永の松崎半三郎支配人か

*秋田県立博物館

ら縁談があり、森永太郎社長も「南朝の忠臣楠家の子孫と、幕末に咸臨丸の勘定方でもあり、徳川慶喜の水戸移居にも力のあった吉岡昆太夫の孫娘の結婚に仲人をさせてくれ」といったので、翌6年に山下と小島長蔵次女文子とが結婚することになる。虎ノ門女学校出身の新婦の父は森永の菓子缶印刷をしている小島印刷の社長で、二人は「時事新報」新夫婦紹介で報道された。父社長の義兄は衆議院議長大岡育造で、伊藤博文の秘書官でもあった名士であった。結婚の効果は早速表れた。義父のすすめでブリキと鉄の輸入を手がけ成功した。資金増強のためにオブラートの権利を白石に譲渡、提示された1万円10年割賦の条件を変えてもらい、半額にして即金で入手、山元商会の全従業員を新橋の一流料亭に招待し在社中の礼を述べるスケールの大きさを示した。

スケールの大きさは人情だけではない。ロシア革命の騒乱下ウラジオストクの缶詰会社が処理を急ぐ鮭缶を三井物産に売込みに来たのに、買付係が輸送を危ぶんで応じなかったのを見た山下は、即座に買取った。現地権力が変わってホロワット政権が船積を許可しないトラブルが生ずると、後藤新平外相秘書松岡洋右を動かし「出兵モ辞セズ」と打電させ、120万円の利益を挙げる商才を発揮する。兵役に赴く弟釜次郎に1円の饞別すらできず、2人の記念写真だけで送ったのに、3年後除隊して来た大正8年には豪華な外車で東京駅に母親と出迎え、弟が動揺する財力変転だった。

釜次郎に手伝わせて始めた会社も大学や高商出の社員を採用するようになる。四高を出た京大生山本源太郎も、アルバイトから社長の人柄に魅せられ長く行動を共にすることになる。

山本が重要な役割を演ずる状況が大正7年8月起こった米騒動により生じた。中国米の輸入を思いついた太郎は彼にその調査を命じ、蕪湖米や禁輸ではあるが江蘇米の一種が日本米に似ているとの報告書を得た。親友江原俊の父で札幌時代から私淑していたクリスチャン教育家の政界でも著名な江原素六の紹介状を携え、農商務相山本達雄男爵の了解と正金銀行井上準之助頭取の協力を得て、8年1月山本を伴った太郎は友人の渋沢正雄の商事会社の支配人であるやはり友人の永野護と3人

で上海に渡った。残念ながら中国の「防穀令」を盾にした有吉明総領事の役人魂の前に挫折したが、広い中国の米穀事情を把握することができ、直ぐそれを南満州鉄道会社との取引に活用する。

結果は江蘇米が満州の水に合わず満鉄から大量のキャンセルを受けたが、損害賠償の請求も放棄し、他日の為の大きな信用の基礎を獲保した。

一方では大陸で得た金を日本に送金した資金も9年3月の株暴落で失い、山本の進言にもかかわらず硫安の売却時機も誤って大損失、社員も数人に減った。そのような状況の中で札幌の親友田所哲太郎北大助教授が店を訪ね、実業家の転変の激しさを見た。10年春に釜次郎に「大楠公の子孫であることを忘れるな」と諭して別れの盃を交わし、残りの全財産を携え腹心の山本同伴で満州に渡った。弟は「英国屋」を経営し呉服や雑貨を満鉄に納める位の業務展開をしていたので、不安定な兄との分離は望む処であったかもしれない。

満鉄で秋田県人川村竹治社長のもとで副社長だった松本烝治博士は、米の事件で太郎の潔さを評価していて、社員宿舎の建設管理の仕事を持ちかけた。当時満鉄には松岡洋右理事や永野護文書課幹部もいたので、初め数百戸の提示が大正11年から終戦までに結局5万数千戸に及んだ。資金も松本博士の紹介で第一生命重役石坂泰三が出してくれたので事業は大展開をし、三井・三菱の次は住友か山下かといわれるまでになった。山下汽船社長も同名だったので彼は『満州太郎』と呼ばれた。「1.5メートルそここの男が、チョビひげを生やし葉巻をくゆらしながら赤い夕陽を背にして立ち、満州太郎の呼び声に胸をそらしていた姿が想像できる」(高多清在『風雲児・アラビア太郎』・宮川書房・昭和42)という表現は言い得て妙である。大正15年(1926)大森町に奨学金を寄付し以後20年も継続し、昭和11年(1936)山下学館を設けた。彼の愛郷心はこの地に長く居住した楠氏後裔の名族であるという伝統の自覚に基づいている。

昭和10年「楠公六百年祭」に湊川神社に1500円を寄付したが、1万円神戸市、5000円三井・三菱、3000円兵庫県・日本毛織、2000円住友・神戸瓦斯・鐘淵紡績に次ぐ巨額であった。同12年5月「楠公同族会」を結成会長になり、高さ40尺、柱石3

尺7寸5分の岡山県産石の大鳥居を寄進した。鳥居は翌年8月末日崩落したが、17年(1942)表神門を寄進した。20年3月17日米軍機の爆撃で社殿は炎上したが、神門は焼けなかった。昭和47年が神社創建100年に当たり彼は奉賛企画もしていた。

昭和15年10月母校を訪ねた彼は田所の案内で青年寄宿舎を懐旧の訪問もした。北大理学部で手狭な友の研究室も見た。昭和15年秋落成した生物化学研究所の寄附はこの時山下の方から申出たものだという。昭和35年頃にはこの修理費200万円も寄附した。この旅では往年の矢絣の恋人少女が幸福そうな母親になっている姿も見かけ、同級会で会場の料亭の女将になっているお雪さんにも会ったという。

山下の運命はまた暗転した。第二次大戦の敗戦である。当時で8億円とも10数億円ともいわれた大陸の金円は無に帰した。総資産は数千億だったともいう。だが高輪の邸には東京都知事公邸の表示を出し、重要会議の場に提供したという。昭和24年(1949)には石油を視野に入れた事業を考え復興建設、公共建物株式会社などを設立し、ドッジ公使と会談するなどの動きをみせた。翌年旭硝子の株買付けに勝利、26年(1951)には彼が手を引いた山元オブラートに勤めていたという情報から縁を手繰り、吉田茂宰相側近の広川弘禪と親交を結び、遂に31年丸善石油と協力日本輸出石油会社を設立し社長となった。重役は石坂泰三・藤山愛一郎・桜田武・石橋正二郎・和田完二など錚々たる人々で、正しく山下太郎の再出発である。

最初はスマトラ油田開発を目指したが断念、翌年中東動乱の中でサウジアラビアが打診していた石油利権について、土田大使をパイプに、岡崎勝男らと石橋首相の親書をサウド国王に提出、利権獲得を文書で申し入れ熱意で成功、33年2月会長石坂・社長山下のアラビア石油が誕生し、5月にはクウェートの利権も獲得した。技術的苦難もあったが、昭和35年(1960)1月遂に採油に成功し、多大な国益を確かにした。単なるホラ吹きでも山師でもない。世に「アラビア太郎」と呼ばれるようになる。

5年来病床で苦闘していたが、昭和42年6月9日夜、数えて79歳で心筋梗塞で逝去する。従三位

勲一等瑞宝章に叙せられた。13日青山葬儀場で社葬が挙行された。墓所は故郷大森町の大慈寺にある。たまたまアラビア石油の権利消滅の時に感慨深く山下太郎の館話をした。

没後も大森町と山下の関係は密で平成元年(1989)4月9日生誕百年記念事業として胸像を建て、かねて大森小学校に平和の像・森の子像などを贈られた文子夫人に、阿部勝行町長が相談し、私財10億円の提供を受け「財団法人山下太郎顕彰育英会」を創立、10月1日付で認可された。秋田にとって誇るべき活動が展開されるのである。

今野賢三

明治26年(1893)8月26日南秋田郡土崎港町肴町に、小間物屋を家業とする父長治郎母カネの長男に生れた。本名は賢蔵である。翌年日清戦争で父が台湾に向う船中でマラリアにかかり戦病死し、のち母は叔父と再婚したが義父は家に寄りつかなかった。明治33年(1900)4月1年遅れだったというのが土崎尋常高等小学校に入学し、そこで近江谷駒・金子吉太郎と同級になる。37年高等科に進んだが、この年日露戦争で義父慶吉が戦傷を負い帰郷する。家政は成り立たなくなった。39年一家離散となり、彼は半年ほど函館の叔父の許で暮らして戻り復学、新聞配達をして家計を助ける。

明治41年3月高等科を卒業し、秋田市大町秋山呉服店の丁稚となる。ようやく彼の生活も安定したかと思われたのであるが、翌々43年呉服屋は破産し、また家に戻り、新聞売りなどをし不安定な状態になるが、この間に基督教を知ることになった。文化史的に考えて当時の青少年として重要な経験だったといえる。44年8月東部鉄道土崎工場の見習職工となった。定職を得たように見えるが翌春退職し豆乳販売をする。よく秋田魁新報に短歌の投稿をし、文学青年の一面を表わす。

明治45年(1912)9月に上京する。先ず洗濯屋に勤めたが、11月に東京瓦斯会社の定夫になる。魁への短歌投稿も続けていた。東京暮らしが地道に展開しているように見えたが、大正2年9月に外交問題に関する外務省へのデモで先頭をきって検挙され、失職する。12月に中央郵便局集配夫になって、なお文学青年の傾向を鮮明にする。日本自

然主義文学に親しみニーチェやトルストイの作品にも親しんだ。そして大正3年(1914)彼は浅草三友館で活動写真の弁士になった。22歳で職業上の一転機を迎えたことになる。4年2月郵便局を止め、東京の本所や水戸で弁士出演していた。

5年7月には、秋田や土崎で初めて弁士の仕事をして、東京に戻った。親友の金子吉太郎(洋文)も10月には上京して行く。そして賢三は翌年秋田県内の秋田矢留館で弁士をし、7年には能代港町の淳城館で洋画の弁士をやり、小川洛陽の芸名で人気を博した。牛丸兵衛や大坂万作など親しく交わり、秋田魁のほかには北羽新報にも寄稿し、秋田県内でも然るべき存在感を示すことになった。

弁士という仕事が人気タレントであり、交際範囲も、その方面に地歩を占めて拡大したものであろう。当然派手な生活になる。しかし収入が消費に追いつかなかつたらしく、借金に借金を重ねながら芸者遊びをしていた。時代がそういう感覚であつたろうから娼婦と接することなどは不道德感すらないものだったようにみえる。大正8年も9年も東京と土崎で弁士を続けたが、9年(1920)から11年までの彼の日記を「今野賢三青春日記」というサブタイトルによって纏めた佐々木久春編『花塵録』という好資料があるが、その中から目につくままに出て来る芸妓名を拾うと、きん子・百合子・千代葉・ふさ子・照千代・老松・清香・豆二・コトジ・ポン子・とみ子・千成・小奴・小定・えい子・笑子・小夢などという多数に及ぶ。そして大正9年10月頃から、照吉という芸妓のことが、日記に出て来る。とみ子と比較もしている。それ以前にはふさ子のこともあり、弁士をしている時間以外は、芸者と遊んでばかりいる如くでさえある。照吉ときん子との二人を呼んだ時のことについては、

照吉を昼見ると、あまり美しいといふ惹きつける或るものがその顔になかった。かへって醜い点さへ見えた。そつ齒をかくさうとする点。鼻がひくい点……。そして夜でなければ自分を恍惚とさせないものだと思はせた。きん子さんがゐたせゐるか、照吉さんはなんとなく、態度があらたまつて見えた。それでもかへってからは、自分に対しての好意がありありと読めたやうな

気がした。酒をしきりに進めたりする微細な行為からも。

最初きん子さんがはいつてきたとき、自分がなぜもっと感情的に率直になり得ないか一と、情けなく思った。最つと、「きん子さん」と呼んで、面と対さねばならない筈だ。きん子さんの率直に洋文兄に対する執着や、将来の悦びなどを、あどけなく表現するところを見ると、うらやましいとさへ思った。「ああさうなつたら」と呟いて、私と顔見合せて自分で墳笑しながらうつむいたりした。(洋文君に対して)「金だ。金がなければ。金をまうけてくれればいい」かうしてきん子さん達までにも、物質過重の思想が根深くあってゐるのをあきたらなくさへ思った。自分の求めてゐるのはあまりにロマンチックだと思った。が直ぐに、無理はないと思つてゐた。

いろいろな話をしてゐる間に、不思議に百合子さんのことが気になった。招んでやらなければならないの、と……。百合子さんには私に対する親しみの必然さを見のがされなくなって来た。話は洋文兄の話で持ちきつた。「人は何回犠牲になればいいものでせう？」かういふきん子さんの言葉も出た。四時頃私たちがひきあげて五時二十幾分の汽車で母を停車場へ送ってから、金子君のうちへ寄つたが、母娘がいかにもさびしく見えた。「しづさんが若し自分を恋するやうなことがあつたら」とそんなことが考へられたりした。夜は早く眠る。

と書いている。若干の省略以外原著の表記に手を加えなかったが、28歳の成熟した青年の率直な心情の綴りであるから無理もない。ただ、女性を対象にした分岐する心の動きが特に顕著に表れているようにも感ずる。大正の時代相と弁士業の社会性などが出てゐるのかもしれない。

大正10年(1921)1月近江谷駒の叔父近江谷友治に、「種蒔く人」の同人に加入することを勧められる。この同人誌が2月25日に東京青山の小牧近江が編輯兼発行人で創刊される。小牧近江は駒の筆名である。18ページ、定価20銭で、いわゆる土崎版である。彼と関係深い土崎の寺林印刷所で印刷された。彼は自ら「私の人道主義」と定義して

いて、「人道の叫び」を「戦闘の芸術」とするという立場の彼には、それほど明確な社会主義理念があったようには受取れない。それは金子洋文も同じことであるといえよう。だがこの大正を表徴するような社会主義の雑誌の同人になり発行に加わったということは、秋田の人として画期的史実を形づくったことになる。唯、新聞法に基く保証金が払えず、10年4月発行の第3号で休刊となる。

他の女性にも心を動かしたことが日記に見えるが、結局大正10年なっても昭吉に惹かれ続ける。しかし家庭のことなど色々な事情があって、29歳の彼の申出を19歳の彼女が受容れることはなく、11月4日に体を許し合ったことを契機に別れることになった。

この間極めて彼にとって重要な経過が展開していた。文士を志す彼が著名作家有島武郎に大正8年7月短篇小説を送り、7月21日付で能代港赤館町に住む彼に返事が届き、手紙で生活は意義あるものと感じたが、創作の方は未熟で、発表しても差支えないと思って発表したのなら、発表は軽率だ。世の中の人々が少しなりと美しくなり深く考えるようになるという確信を持たなければ発表すべきでない。という厳しい批評を受けた。にもかかわらず、熱意が若さか、彼は諦めることなく有島私淑を続け、8年10月上京し谷中の金子洋文の住む福富館に9年7月まで滞在し、在京中も有島に便した。帰県後も「種蒔く人」を送ったり、母の死を知らせて悔みの書状を受けたりした。関係は有島が死去する12年6月まで続いたことになる。

この大正12年8月までに「種蒔く人」は20回発行された。土崎版が休刊した後半年で10年10月3日東京で再刊第一巻第一号が近江谷駒（種蒔き社）編輯発行、英文通信社印刷で発行された。56ページ、30銭であった。度々の発禁処分を受けながら、資金欠乏もあったのに20号まで継続されたのは、毎月1円だったという同人費を、近江谷・金子・今野の3級友と、近江谷友治、駒の従兄弟畠山松治郎、畠山の友人安田養蔵、金子の友人山川亮の7人が負担して努力したからである。11年6月の二巻九号から編輯発行人の名義は、この年2月上京していた今野賢三になり、これによって彼は歴史上不滅の存在となった。12年(1923)9月

1日関東大震災で休刊となるが、震災関係号外も出し13年1月『種蒔き雑記』という終結号が出された。彼は32歳であった。

明治43年父の外遊に伴われてパリに渡った駒が、大正8年に帰国し、第一次大戦期をパリで生き、この間第三インターナショナルの運動に参加し、この運動の使命感に燃えて展開した社会主義運動であった。駒と同窓の暁星中学で学び在京中社会主義に接した畠山、慶応大学で学び社会主義の学説も知っていた友治らを中心にしたこの運動の方向は明らかであった。今野賢三は13年「文芸戦線」創刊に参加し、自伝的小説『暁』3部作の初篇「闇に悶ゆる」を発表する。この文学活動と共に、秋田普選即行連盟協議会の結成にも参加することになる。14年3月から政治研究会活動で帰郷することが多くなり、大山郁夫を秋田に招き遊説、翌年9月労農党秋田支部発会遊説、無産農民組合運動を推進し、昭和3年(1928)年の第一回普通選挙では畠山の選挙応援など秋田県第一区の無産大衆党の演説会に堺利彦らと参加した。

昭和4年には東京市会議員選挙で堺の応援をし、昭和初年は秋田県下の連年の小作争議の指導をしたりしながらも4年『今野賢三集』、5年『プロレタリア恋愛観』などプロレタリア文芸の面でも多くの作品を発表する。そして昭和9年(1934)年『土崎発達史』、11年『土崎郷土読本』、12年『苦の親鸞』などから出版物の傾向が変化を見せ、14年『佐藤信淵』、15年『松下村塾』、翌年『土崎港町史』、18年『前田正名』というように、歴史・伝記が著述主題になってくる。心境変化もあったのであろうか。

昭和20年(1945)の終戦を数え年53歳で迎えた彼は、翌21年8人定員に41人が立候補し、婦人代議士の誕生した戦後初の総選挙に立ち、落選した。22年には社会黨員になった。その後29年『秋田県労農運動史』、32年『秋田市の今昔』などを著す。この頃秋田市立高等学校の講堂を兼ねた体育館で、教職員各位生徒諸君と共に、60歳代半ばであった筈のこの人の話を聞いた。マルキシズムの史観の盛んな時でもあり、「種蒔く人」の発行責任者だった老先生の話という期待感をいだいていたが、歴史的人物の話だというような鋭さは感じられな

かった。37年『種蒔く人』とその運動』、42年には75歳で『近江谷友治伝』などを著した。旺盛な執筆意欲である。

昭和44年(1969)10月18日静岡県清水町の国立病院で死去した。数え年77歳であった。

大山幸太郎

明治6年(1873)6月8日雄勝郡幡野村倉内須田秀治の次男に生まれた幸太郎は、大山家の養子になった。生まれた須田家は代々医者で、秀治は、佐藤信淵の曾祖父須田元庵から8代目だという。いわゆる佐藤家五代の家学の伝えていえば、信淵の高祖父で元和7年(1621)中仙道村村上縫殿之助の弟に生まれて、歿庵信利の養子になった元庵は、寛永13年(1636)に上塩越村の大庄屋須田惣左衛門の四男に生まれたとされている。

幸太郎は、生後80日で弁天村二井田の大山安太郎の養子になったのであるが、実子として届出される。養母は生母の従姉妹であった。山下太郎が祖父母の子として届出されたようなことである。大山家は素封家だったので、明治13年(1880)自宅の母屋に「共和学校」という小学校を開設し、学齢に達した幸太郎少年はこの学校に入学した。6年程で廃校になったという。18年彼は湯沢町尋常高等小学校高等科第2学年に入学するが、翌年父の病気によって退学。岩崎町尋常高等小学校の「お手伝教師」になる。月俸1円50銭であった。同21年には秋田県尋常小学校授業生検定試験に合格し、弁天村尋常小学校勤務となった。

秀才の彼はこのままでは済まなかった。正式な教員になるべき秋田県師範学校に入学することになる。28年に卒業し横堀尋常小学校訓導として勤務し、今のPTAに類するような組織をつくったりして教育指導の実を挙げた。実際に彼の活躍は郡視学の眼に止まり、中心地の湯沢尋常高等小学校訓導に転勤となった。いうまでもなく栄転であったが、彼には不本意だったらしい。だからこれも不本意であったのではないかと推量されているが、翌明治31年(1898)年に秋田県師範学校訓導に転勤する。附属小学校の教育に当たった。

明治33年休職する。ただ、師範学校の卒業生には5年間の義務勤務年限があったので、附属小学

校の訓導を辞職するのは明治34年(1901)であった。この年東京に出、北豊島郡巢鴨町東福寺に止宿し法律の勉強に励んだ。やがてキリスト教研究者の新井奥邃に私淑し影響を受ける。その結果「宗教制度を論ず」で予備試験を通過し、38年には高等文官試験に合格した。39年文部省に勤務することになり、教育行政に関心を持つようになり、やがては奥邃と同居するようになった。心酔の限りというべきであろう。それでも明治42年4年間の師奥邃の許を離れ、多田セツ25歳と結婚する。彼は37歳であった。彼女は、盛岡出身多田政固(秋田中学校長)の娘で、女子高等師範学校を卒業し上田高等女学校の教師をしていた。井口あくりの姪であった。しかし3人の男児は出生直後死去した。

明治45年に『日本教育行政法論』(844頁・目黒書店)を出版し、教育行政を研究するため大正3年(1914)独逸を目ざし欧州に留学することになったが、世界大戦の為に目指した独逸に入らず、スイスで研究生生活を続けた。10年に成果『世界永久平和に関する思想』(独逸語)を公刊した。彼は研究に没頭していたが、11年に妻から師奥邃の病が重篤であるという連絡を受け滞在8年のスイスを発って帰国した。しかし師の死には間に合わなかったが、帰朝の翌年長女恵子が誕生した。51歳で父親になったのである。

大正13年(1924)『絶対運命の精神』前編を出版する。この年秋田師範学校では幸太郎の2学年先輩であり、明治40年には新井奥邃塾に仮寓したこともある(中嶋修三『和田喜八郎』・平成10)という和田喜八郎が、宮城県第一高等女学校長から母校秋田師範学校長に着任した。このことから大正15年(1926)に至って幸太郎が秋田師範学校専攻科の哲学講師になるという縁を導いた。講師に招かれた時、幸太郎は「自分の平和哲学は現政府の意に添わないから」と固辞したが、校長は「自分が全責任を持つ」と三顧の礼を尽したと、鎌田賢之助「熱血の平和哲学者 大山幸太郎」(『秋田人物風土記』・昭和書院・昭和48)には記されている。戦争は最悪で絶対に避けなければならないとする哲学者は、週5日の講義を担当した。

月200円の手当は校長の給料よりも高かったというから、和田校長の熱意ある大山講師に対する

評価は、初め一学期間勤務の約束だったのに最終的には6年間に達し、246人の教え子が学んだ。教材の「哲学パンフレット」90講は受講者たちには宝物視された。この間昭和3年2月赴任の鯉沼巖秋田県知事は大山と高等文官試験合格の同期であった。その「良二千石」としての県知事が送迎車で通勤するのと、下宿館岡家から徒歩で学校に行き来する一人の講師は千秋公園あたりで行き交う可能性もあったらしいが、もし現実性が伴ったらどのような対応になったものであろうか。

我々は彼と同じ時期に秋田師範学校に在職した哲学専攻者の文章を今も読むことができる。秋田大学で哲学を担当された樫尾直次郎名誉教授は

彼が秋田師範の講師のときのことであるが、左翼思想化を疑われた一人の生徒の退学処分が問題となったことがあった。右翼色の教員の中には、幸太郎の出席を求めて、彼の意見によって可否を決定せよと主張する者があって、論議の末幸太郎を職員会議に出席させた。筆者もその会議の末席にいたが、それがさながら、彼を「踏み絵」の前に立たせるように感じられてまことに不愉快であった。しかし、筆者の不快感とは反対に、そこで意見を述べた彼の態度は、少しもためらうことなく実に堂々たるものであった—永世局外中立の国スイスでは、左翼思想も右翼思想も自由に意見を発表し合い、言論を十分にたたかわせた上で、国民は各自の良心に従って思想を選択することができる。日本もこれを見習ってはどうか—という意見であった。

(『秋田の先覚』秋田県・昭和46)

いわゆる満州事変などの起こる世情に加え、和田校長が3月で退官した昭和7年(1932)に、彼は師範学校を辞して東京に戻ったのである。

その後野に在って思索し著述していたが、昭和16年(1941)に対米英の戦争が勃発すると、第二次大戦を「思想戦」と位置づける彼は、自分の哲学の立場から、一方が倒れない限り終わらないと明言し、思想を守るべく早速郷里弁天村に疎開し、思索と著述に従った。結局妻セツと娘恵子も昭和19年になると弁天村に疎開することになった。日本が敗れ終戦になるが、「開戦の初めから予想されたことだった。日本国民の受けた、このような

災難も、結局は絶対運命といわるべき天則に支配された結果とあきらめねばならない」との思いを書いていると、前出の「熱血の平和哲学者」の文中には記される。70歳を過ぎていたのに、新しい哲学「真人学」の形成に立ち向かったのである。昭和21年に娘恵子は南秋田郡弘戸村出身の渡部景隆東京教育大学助教授と結婚する。後に筑波大学教授として著名な地質学者である。八郎潟干拓のことが進められつつある昭和36年、学生たちと夏の休暇期に入ると恒例として行っていた地域調査研究を、この年は当時の琴浜村渡部で行った。秀才を生み育くまれた、多分婦人会長の渡部セツ女史の御世話を頂き合宿の舎屋をも定めることができた。その恩恵を感謝を以て今も記憶しているが、おそらく昭和50年代末の頃偶然渡部景一校長に琴浜調査時の話をし、女史が校長御兄弟の母堂なることを再確認したのであった。思えば嫁した渡部氏の母堂と実家の母堂の名前が恵子婦人にとっては同名であるという縁であった訳である。ところが、昭和29年(1954)1月14日父君の自費刊行著作『真人学概論』の出版を手伝っていて急死した。喘息だった。この名著はその直後の2月25日に世に問われ著者は82歳だった。絶対運命という至善の意志として宇宙のあらゆる現象を貫通支配している真理を実現するのが「真人」だという。

著述は完成しても、全く老いていない精神の主である哲学者大山幸太郎の学問研究は静止はしない。さらに、自然現象の天則を発見する自然科学に対応する、文化現象を貫通支配する天則を発見する学問「文化科学」という絶対的な科学を追究する生活が継続展開される。その著述が成稿を見たのは昭和42年(1967)の「死去の1カ月前」(『秋田の先覚』5)であったという。時に彼は数え年95歳であった。驚くべきことである。

その『文化科学原理』の自費出版の件が決った夏、七夕の夜に病床に就き、甥の須田春育医師の診療を受けた。病名は脱肛で、排便ノイローゼになり、7月28日に、「先にゆくよ」と夫人に告げ巨大な一生を閉じた。孫はいないので血統は絶えたという。翌43年1月に教え子たちの組織した刊行会で遺著は刊行された。全国の大学や図書館に有償無償で配布されたこの書の冒頭には「人間は

何のために生きているのか。いつでも幸福に暮らすことができないのか。永久的平和というものはあり得ないのか」と書いてあり、霊魂は人間の精神力なので、人間が死ねば霊魂も消えるが、その精神力が作り出した語句を読者が記憶している限り、作り出した精神は不滅で、その故に釈迦・孔子・キリストなどの霊魂は不滅であるという論法だという。この書の配布報告の墓前祭を行い、遺志を継ごうとした弟子たちは、43年6月「真人学会」を結成した。機関誌「真人」も発行された。

昭和46年(1971)セツ夫人は逝去、遺言により「大山幸太郎文庫」が秋田県立秋田図書館に寄贈された。54年(1979)には湯沢市勤労者いこいの村に顕彰碑が建立された。

川村文子

明治8年(1875)11月20日山本郡太良鉾山に生まれた文子は、鉛などを産出する一つの在郷町を形成充実した鉾山に勤務する医者之父武田三祐と江幡氏の出である母きよとの間の次女であった。父親の書いたものには「婦美」とあり、文子になるのは、戸籍によると昭和25年9月28日のことになる。彼女が生まれた時、兄の三喜は6年生、姉の賀根は3年生であった。

武田家は北秋の名門で、江戸時代は本拠が十二所であった。鹿角口の要衝十二所は初め塩谷氏が鎮将であったが、のち茂木氏が所預となった。武田家はそれに仕える儒医で、三秀と号した久豊は京都堀川学派伊藤家に遊学した古義学者でもあった。子の三益、その子の三省と続く名家である。文子の父三祐はこの累代の家業を継承していたわけである。

母きよ(清)の祖父工藤東山も有名な学者であった。大館市の宗福寺に工藤家の墓所があり、後年彼女はそこで「我母武田清子翁ノ孫ナリ 昭和六年八月 遠孫川村文子誌ス」と誇らしくさえ読み取れる、高らかな追憶の情に発する詞を記している。そののみか、文子は昭和9年(1934)四女キミを工藤家の後継者としていわば工藤氏の再興をさせている。母親とそのルーツに対する気持が実に明確に示されている。工藤キミは昭和35年(1960)母の後を継いで川村学園の第2代理事長・学園

長になる人物である。

明治14年(1881)10月文子は太良学校に入学、17年初等卒業、19年10月まで在校したと、父の編んだ『武田氏系図』にある。19年には秋田町に移住するので、太良学校から師範の附属小学校に転校することになる。この年武田氏は秋田東根小屋町の13・14番地に土地建物を購入し、11月に引越した。父の書くところの婦美すなわち文は転校した附属小学校で22年(1889)3月高等小学校の全科を卒業した。ところで『武田氏系図』では21年6月に母キヨは離別され、11月継母の黒沢氏が入り、24年には第三郎が生まれたとある。24年(1891)に彼女は秋田県尋常師範学校に入学した。師範は寄宿制なので、弟の生まれた家庭生活の影響はそれ程直接には受けなかったと考えられるが、それ以前の21年6月からの母と別れた生活は少女の心情に深く影響したと思われる。それが工藤家再興の熱意の根底を形成したのかもしれない。

明治27年(1894)尋常師範学校を卒業し、土崎尋常小学校訓導となるが、7月には保戸野小学校に転勤になる。何か思うところがあり自ら求めたのであろうが、28年(1895)11月6日に依願休職したと父の書いた系図にはある。次の行動からみると、彼女の思うところは受験だったのであろう。すなわち、六郷・大島の2人の女性と共に女子高等師範学校の入試に挑むのである。そして3人共に失敗してしまう。2人は帰郷したらしいが、彼女だけは違っていた。

一人本郷の大島久直将軍邸に下宿し、麴町の明治女学校に通うのである。失敗した受験生の大島という女性は将軍の縁者なのかもしれないが、武田家も将軍と親密な関係にあった可能性がある。後に秋田出身唯一の陸軍大将になる大島将軍は、久保田生まれながら、青年期十二所に移住し、その後上京しており、その後も十二所に故郷の情を持っていたというから、十二所で藩政時代の勤務をした武田家と親交があっても不思議ではない。そうでなければ乙女一人が将軍家に宿所を定め学校に通うなどとは考えないであろう。

彼女は明治30年(1897)4月23日明治女学校を卒業する。前年11月からとしても至って在学期間が短い、秋田で師範学校を卒えていることが通算

された経歴だったのであろう。明治女学校第9回卒業普通科15名の同期生には、津田梅子の妹の津田鞠、長岡輝子の母の長岡栄、島崎藤村夫人になる秦冬などがおり、彼女の名前は「武田ふみ」と書かれている。父の書いた婦美は、音標文字の万葉仮名流のかな表記として漢字が使われたわけである。彼女は大島邸寄寓中に恋人を得たようである。その人の名は川村竹治であった。

川村は明治4年(1871)7月17日に江刺県花輪村で、俊治・クニ夫妻の長男として生まれたが、武田家が秋田に移住して間もない20年夏秋の頃に上京し、翌年5月に花輪を引払い父母と2人の妹の一家を挙げて上京した。そして彼が秋田県を出たのは発憤するところがあったからだと伝えられている。どうもそれは秋田師範を受験したが入学できなかったからだと見られている。単身上京をして様子を見てから家族を伴っているから、入念な判断の結果の行動だったのであろう。上京して第一高等学校、東京帝国大学法科大学と進み、30年7月卒業する。勉学期間は「鹿友会」の学費援助を受けた。この会は、鹿角出身の石田八弥・内藤湖南・大里文五郎などが郷党のために育英活動をしていたもので、この恩恵を深く感じたらしく、後には川村竹治本人も基金を寄せ理事にもなるのであるが、卒業の年11月に高等文官試験に合格し通信省に入った。

明治31年(1898)7月15日彼女は通信省書記官の彼と結婚した。「亜州」と号した夫との間に明治31年9月18日に長男秀文が誕生する。以後36年長女レイ、39年次女ミドリ、43年三女タカ、大正2年四女キミ、4年次男正明が誕生する中で、夫は多度津・長崎・横浜・神戸・大阪と郵便局長の地方勤務があり、さらに明治41年には内務省に移り、内務省警保局長、42年台湾総督府内務局長、44年和歌山県知事と転任することになり、妻として母として彼女は、家政を見つつ明治35年頃から長崎・神戸・大阪と愛国婦人会評議員を務めることになり、6年間に9校を転校する経験もしなければならなかった。和歌山県のあと、大正3年香川、6年青森と県知事を勤める夫に随伴して、知事夫人として各県の愛国婦人会支部長の職責を果たすことになる。7年内務省警保局長として東京に戻

る夫と一緒に帰京した。10年に夫は加藤友三郎内閣の内務次官になり、同年貴族院勅選議員となる。さらに翌11年(1922)南満州鉄道の社長になる。もう総裁とは言わなかった。

このような夫妻の辿った軌跡が発想を導いたのであろう。転勤族の子女教育の大変さを解決する方法という理念もあった如くで、大正13年(1924)4月12日川村女学院開院式が挙行された。院長に就任した彼女を、3月20日付秋田魁新報は「県人最初の学校経営＝発奮した川村文子夫人＝」と報じ、同日付東京朝日も「かはった特色」と報じた。夫は政友会・政友本党顧問になる。だから中には、満鉄勤務以後浪人的立場にあった竹治が、「夫人を担いで学院を開かせたのだ」という説を唱える向きもあった。

川村学院の創立に際し、秋田もまた博物館も関係ある一つの事柄があった。女高師出身の須磨弥吉郎夫人は女史が教員として学院に迎えられたことである。子息末千秋氏の著作によると、川村家と須磨家との親族説もあると記述されている。花輪の川村家と土崎の須磨家との間に藩政時代に自然の親類関係を生じていたか否かはわからないが、川村竹治学院評議員は、この年8月女子教育視察のため欧米に外遊し、米国大統領にも会い、翌年3月28日帰朝した。川村家一族の力を結集して学院経営に当たったことがわかる。

大正14年(1925)4月8日川村女学院高等女学科を長崎村に開き彼女は校長に就任、5月30日在校生・卒業生・職員によって組織される鶴友会の機関誌『鶴友会誌』も創刊された。第8号からは『鶴友』と改称される。15年からは教室を研究室と呼び研究精神を昂揚させ、寛克彦博士の線などから皇后の体操に由来する「やまとばたらき」なる体操皇国運動を始め、翌昭和2年には附属幼稚園を創設した。彼女の愛唱したものに明治天皇御製の和歌がある。非常に愛国心の豊かな学校経営者であった。だがそれは「本当の日本精神を養ってきたのであります。所謂偏狭な日本精神のことではない」(『紫雲録特集』第二号・昭和33)と自ら明言しているように、日本文化の普遍性というものを深く認識した上で、創立以来の教育をして来たものと認められる。

彼女が昭和2年に第一校舎の屋上で荘厳な日の出を見て詠み、長く教育活動の中でも『感謝の歌』と名づけて斉唱されて来た「かしこしやこの世守りととこしへにみいつも愛も限りあらじな」という一首の中にも、彼女の立場が読みとれると思う。感謝、愛、平和、希望、勤勉などを目指す学園精神が、彼女の教育理念を示している。昭和3年6月川村竹治は台湾総督に就任した。11月10日には夫妻で即位の御大典に参列した。この秋卒業学年の参宮旅行（関西旅行）を始める。

昭和4年(1929)には2年制の高等専攻科（国文・家政）を開設し、1年制の専修科も併設した。台湾旅行をしたという記述も見受ける。夫君の任と関係してのことであろう。絵画部も新設し、沼津に海の寮、北軽井沢に山の寮の開設にかかり、夫君の人脈で後援会も組織された。山の寮はこの年に、海の寮は翌年に建設を見た。昭和4年から学院校歌の歌詞が募集されていたが、学院の講師でもあった秋田県出身の音楽家成田為三によって作曲され、やがて9年の創立10周年記念祭で発表される。昭和7年には小学部が開設され、幼稚園・小学部・高等女学部・高等専攻科の一貫教育体制が完成した。

この年3月犬養内閣の司法大臣になった竹治は、五・一五事件によって短期間で辞職するが、政界では政友会総裁の下馬評もあった。しかし少しも動ぜず参禅していたという。政官界を去った彼は一層学院評議員としての努力をすることになったものと考えられる。13年には後に大学の紀要になる旧職員興文会の機関誌『興文』が創刊された。15年(1940)には川村学院（男子）を開設竹治が校長になり、彼は財団法人川村学院の理事長にも就任した。昭和16年(1941)財団法人川村女学院が設立され川村文子が理事長となった。財団法人は26年(1951)に学校法人になるが、その前に23年には川村中学校と改称し、さらに新制川村高等学校も設けられ、竹治が校長となる。24年には授業週5日制を実施し、26年再開の小学校では初等部通算14期生が4月に入学した。校長は川村文子である。5月に文子は藍綬褒章（内閣）を受け、10月副学園長に次男川村正明が就任した。

昭和27年(1952)短期大学家政科と川村幼稚園が

開かれ、竹治は高等学校長を退任し、文子が小・中・高校長を兼ねることになる。28年3月男子生徒は最後の卒業となり、4月には短大保育科も増設された。新制度の学院の整備は着々と進んだが、10月に正明女学院理事・副学園長・総務部長が逝去し、翌29年の創立30周年を迎えた記念行事に対応することは出来なかった。さらに30年(1955)学園顧問・理事の竹治が9月に85歳で逝去した。33年文子は病気になり、長男秀文が短大学監となった。世代が交替する情勢の中で翌年35周年の記念式典が挙行された。

名女子教育者の学園長・理事長川村文子は、昭和35年(1960)12月1日午前2時35分、86歳の生涯を終えた。正六位勲五等に叙せられる。理事長・学園長・学長以下の諸役の第2代には四女工藤キミが就任し、副学園長には、正明夫人の川村澄子が就任して、川村文子の精神は継承されることになる。

武藤鉄城

明治29年4月20日河辺郡豊岩村前郷に、明治42年から大正5年まで豊岩村長を務めるような地元の名家である父喜市郎と母シケの、四男として生まれた。鉄城の名は鉄四郎の意味も帯びていたのかもしれない。8歳年長の長兄一郎は考古学の研究家であったが、生長の過程でその兄の影響も受けた。考古学は史前学と呼ばれていたが、一郎は『史前学雑誌』への寄稿家であった。秋田中学を卒業して志願兵として軍隊に入り、除隊後は小学校教員となり、名のある家門の長男として大正8年から郡会議員となり、後に昭和15年から21年まで豊岩村長であった。終始秋田考古学界の指導者として活躍し、44年81歳で世を去った。

明治41年秋田県立秋田中学校に入学した鉄城は、大正2年(1913)高田で開かれた第1回スキー大会で、距離競技で4位と6位に入賞した。翌3年中学校卒業、慶応義塾大学理財科予科に入学した。スキーやホッケー・ラグビーなどの新しいスポーツで活躍するほか、蟻地獄のペンネームで文筆活動も活発に行った。そうした才能が地道に学習することを妨げたか、大正7年(1918)7月理財科本科2年で退学し、在京のまま文筆とスポーツとの

活躍が続いたのである。9年帰郷するが、この方向は継続され、文学の創作も行うようになった。

大正11年(1922)5月羽後銀行秋田支店に就職したが、半年で退職しスポーツ具店を営んだ。しかし経営難で間もなく閉店したという。11月に二井田村猿田川の米国帰りの農民運動家堀井金太郎(梁歩)の妹で小学校教員のヒデと結婚した。一方銀行勤めは数年間続いたとの説もある。13年「新秋田新聞」に民俗・考古・スポーツ、さらに大学で学んだ経済に関する文章も執筆した。7月には長女敏子が誕生した。

彼も設立に参画した秋田考古会が発足した14年に、角館町では大威徳山にスキー場を開設した。翌15年12月この角館の友人田口宗七など数人が、スキーの名手武藤を角館に招いたのである。角館町山根に転居して角館小学校代用教員に採用された。夫人も角館近傍の神代村小松小学校教員に転勤した。まさしく河辺人から仙北人に一家移動したことになる。生活は経済的にも安定したことになるから、親しい文化人奈良環之助が、余暇に地方研究に精力的により熱心に打ち込んだと評するような生活ぶりになり、「秋田魁新報」にも繁く寄稿することになる。

昭和2年(1927)には「史考会」を結成する。次女玲子の誕生もあった。そして昭和4年1月ノルウェーのヘルセット中尉に習い9尺長さのスキーを角館に持込んだ。昭和3年からこの4年にかけて別の方でも一つの展開期を迎える。まず3年5月に兄一郎や秋田魁新報社長安藤和風らと「菅江真澄百年祭」を行う際、史考会に働きかけて角館でも一緒に行こうことにし、秋田では柳田国男が、角館では東北帝国大学講師喜田貞吉が講演を行なった。これは近代における秋田の真澄研究に画期的な記念すべき1頁を加えることになった。いうまでもなく真澄に中央から注目したのは民俗学の柳田であるが、その柳田と角館や秋田のつながりの生ずる原点は、角館出身の日本画家平福百穂と柳田の親交にあるというのが、秋田県文化財保護協会柴田正蔵角館支部長の教示である。そこから洪沢敬三の2度の角館来訪があり、柳田その人の来訪もあって、やがて武藤・富木友治・太田雄治・富木隆蔵らの角館文化聯盟が導かれるのだとい

う理解なのである。蓋しその通りであろう。

昭和4年(1929)に鉄城は「北家日記」をガリ版で出した。11月には考古学の面で指導を受けて来た喜田貞吉博士に招かれ、東北帝大法文学部奥羽史料調査部の嘱託になった。当然角館小学校を辞職する結果になったので、身近から状況を見ていた富木耐一が「学問的に深まったが収入を失った」と書く状態になった。しかし仙台では遠野の佐々木喜善と出会い、「聴耳草紙」の編著に協力するようになり、民俗学の分野でも得るところが大きかった。

喜田博士を東北帝大教授としたり、奥羽史料調査部を調査所と伝えたりする文献もあるので、一応喜田博士について述べることにする。博士には山本樹蔵という山陰地方の中学校(旧制)を出たと聞いている忠実な助手がいた。その人によっても一般にテイキチと呼ばれている博士の名前はサダキチであった。明治4年(1971)徳島県那賀郡に生まれた。父辰吉・母ヌイの三男であった。戸籍には6年生れで二男とあった由であるが、次兄が5歳で夭折したことなどがあり、祖母の考で初め就籍しなかったという。長兄も申年生まれを酉年生まれにされたという。17年6月18日徳島中学に入学した。城下町で田舎出として苦勞したらしい。もともと大栗氏で北大栗家なので喜田の苗字を称したものという。だからキダではない。

明治20年(1887)12月に第三高等中学校の臨時募集があり、中学校予科補充として臨時入学した。理数傾向が強かった少年がハイではない「ヘイ」という返辞で数学教師に「侮蔑するのか」と叱られ数学嫌いになり、26年7月卒業して帝大に入るに際しては国史科に入ったという。方言的返事が大歴史考古学者を生むことに導いたのである。29年7月大学院に進み、9月1日真宗東京中学の講師となりさらに真宗大学林予備校教務主任を務め、31年私立成田中学校校長になる。32年日本歴史地理研究会を組織する。33年早稲田専門学校講師で「日本地理」教科書刊行。30歳である。34年國學院講師、文部省図書審査官になり、31歳で高野千代子19歳と結婚する。帝国教育会刊「日本歴史」講義録を出した。35年(1902)長男三五が生まれる。この年教科書疑獄事件がおこり、郡視学から知事に至る官界と金港堂、集英社など本屋にまで及ん

だ。これから翌年4月国定教科書制度が成立し、5月菊池大麓文部大臣が引責辞職する。彼は教科書編纂に従事することになり、次男新六が生まれる。39年帝大文科大学講師になり、三男喜三九が生まれる。40年(1907)胃痛起り、10年間続く。

明治41年京大文科大学講師になる。39年に狩野亨吉が学長になり、40年には内藤湖南が講師になった大学である。42年39歳で四男遷吉が生まれ、彼は文学博士となる。43年有名な教科書叙述などに関わる「南北朝正閏問題」が政界で発生し、桂内閣の小松原文部大臣らの政治的な解決で44年教科書編纂官の喜田博士を休職処分とした。喜田博士は大正3年(1914)東大講師解囑となり、43歳京大講師専任となった。7年に向う3ヶ年東照宮三百年記念会から大名領知調査研究の補助を受けた。そして9年京大教授となった。元来休職時から教官として昇任は望んでいなかったようであるが、前年に帝大文科大学時代からの親友内田銀蔵教授が死去したことにより、次の世代がその域に到達する迄中継したものの如くにも思える。

内田銀蔵教授は秀才の誉高い学者なのに48歳ぐらいで世を去った。偶然のことであるが筆者の大学での指導教官古田良一教授は、内田博士の愛弟子といわれたと先輩から聞いた。古田教授もそれを承認している風情であった。そして内田教授も喜田博士をサダキチと呼んでいたということである。大正13年(1924)9月20日54歳で東北帝大講師になり、京都帝大教授を依願免官となる。14年京大講師を嘱託され、京都と仙台で講義を続けることになるが、東北帝大の国史の教官は古田教授だったわけである。仙台で喜田博士は、大正14年以降4年間斎藤報恩会から研究補助を受けて、東北地方の史料遺物の調査研究を行なった。昭和3年(1928)には個人雑誌の「東北文化研究」も発行した。このような流れの中で昭和4年に鉄城は東北帝大に招かれたわけである。ところが博士は昭和5年(1930)5月仙台で風呂場で負傷し、発病して半年間臥床することになる。武藤にとって不幸なことであった。角館でもヒデ夫人が雲然村立下延小学校に転任することになり、一家が転居する状況下7月に鉄城も帰秋し発掘などに精出す。

喜田博士は昭和7年(1932)には還暦祝賀式があ

り、8年には「還暦六十年之回顧」を世に問い、9年には北海道・樺太視察旅行をした。しかしその後体調秀れず、秋保温泉で静養生活を送ることが多くなった。10年には65歳にして順天堂病院で直腸癌手術を受けたりするが、昭和14年7月3日69歳で世を去ることになる。

昭和7年主人公武藤鉄城は、柳田国男の紹介で7月に渋沢敬三の知遇を得ることになる。その原点の処に百穂の存在があったことは前述の柴田支部長説の如くである。渋沢の2月の来訪が武藤に大きな影響を与え、「角館語部四人衆」と称される人々を刺戟したことも間違いないことであろう。渋沢の知遇を得たればこそ『羽後角館地方に於ける鳥虫草木の民俗学的資料』（昭和10年5月）・『秋田郡邑魚譚』（同15年4月）などのアチック・ミュージアム刊行を見たのである。

昭和8年(1933)「靱痕のある土製品」を「考古学評論」に出して異色の弥生考古学者森本六爾と親交を得たが、角館町に居住を戻すようになると、翌9年朝日新聞通信員となって、文筆活動は一層活発化した。その多彩な執筆と発表の跡は、平成5年(1993)刊行の詳しい稲雄次『武藤鉄城研究』（無明舎出版）などの鉄城研究書で明らかであるが、特に仙北地方に関わる二つの古鏡資料に関する論文の幾つかを取り上げてみる。

昭和10年(1935)1月「長元紀年鏡の刻字に就いて」（「玫瑰」）を書いた。もちろん別に『秋田切支丹資料』5巻も編集したし、翌11年「葦名氏と角館」のラジオ放送もした。それぞれ独自の価値を持つ業績である。しかしその夏に、友人の病氣見舞いに白岩に出かけた際の動きこそは彼の本領発揮の圧巻である。仙北郡豊川村鎮座の水神社の太田省司神主に其処白岩で会って、座談の名手の実力を示し、歓談を導き、同神社の御神体の拝観をする了解を獲得したのである。江戸時代には郡奉行の判断もあって「堰神」として祀られたのであるが、事実として新田水路開削中に発掘された古鏡が神体であり、彼は更にその鏡面の線刻された千手観音像の模写までも拝観の上許諾されるという大成果を得たのである。この写し絵があったからこそ、国宝の指定も導き出されたのである。

昭和12年3月に「国宝に指定された水神社神

鏡」というNHK秋田放送局からのラジオ放送を初め、「仙北発掘の古鏡」（こまくさ）・「鏡観音の国宝になるまで」1～3（秋田魁新報）・「国宝になった観音鏡」（仙北新報）・「国宝に指定された水神社御神鏡」（秋田）などを論述して、昭和16年「水神社の御神鏡」（茶わん）などに及ぶが、今の中仙町にこの鏡が出現したのは、延宝5年(1677)新田開発中の米沢村肝入草彌理左衛門が、玉川から水路を掘り、その工事中に出土したのである。「羽州仙北郡米沢村千手観音菩薩由緒事」という史料によれば、野中村三采谷地三十苅で深さ5尺から鏡が「御出生」したので、横堀村肝入所の御検使奉行衆に報告し、鏡を久保田に持帰ったら、堰の鎮守にせよと、3石の米を祭祀料に与えられた旨が記されている。径は15センチメートルで中央に千手観音線刻のある、平安後期いわゆる藤原時代の青銅八稜鏡には、鏡背の記録で鏡面の彫刻者は仏師の僧大趣であり、願主は延暦寺の僧の仁祐であり、「女具主藤原氏」という平泉藤原氏縁りの女性かと考えられている人物が具主であることなどが知られる。昭和13年に国宝に指定され、第二次大戦後の新制度でも昭和28年に秋田県唯一の国宝に指定されている。鉄城がその指定に関する立役者なのである。

またその後も彼が「長元紀年鏡の銘文」（秋田魁新報）などの文を書いている方の鏡は、元禄年中上鷺野村肝入の富岡氏が古館地区の開田中に出土したもので、この白銅鏡は「長元四年七月十二日 富岡女具主県末古公夏虫」などという1031年の紀年銘のある古鏡であるが、共に彼によって紹介され広く認識されたのである。

昭和15年(1940)には長女敏子が角館高等女学校を卒業するという慶びがあったのに、7月に20年近い結婚生活を送り、多くの苦労もかけた筈の愛妻ヒデ夫人が逝去したのである。『秋田の先覚』5の彼の個所には「この年を最悪の年となげいている」とある。そして更に「しかし長女敏子が高女を卒業し勤めていたので心のささえになったとも言っている」とも記している。その通りであろう。それでも仕事については熱意愈々旺んで、北方文化聯盟に参加する。

昭和17年からもういわゆる大東亜戦争の中で正

月が明けることになる。彼は「角館新報」の編集に関与する。記者となり、主筆として活躍する。結局は社長に就任する。身近な存在として『秋田の先覚』の筆者である渡部小勝は「仕事が回って来て生計に多少のゆとりができた」と記している。その段階でのことであるが、若い記者が取材から帰ると、「ソナダ、大した面白い原稿だ」と褒め言葉を発しながら、その原稿をポイと屑籠に捨ててしまう。だが否定したのではなく、完成した紙面には、ちゃんとその取材稿を生かした記事が、彼流に仕上げられて載っていたというエピソードも伝えられている。昭和18年(1943)次女玲子が角館高等女学校を卒業した。きっと父子は充実した歓びを感じたことであろう（この館話は玲子女史に聴いて頂くことができた）。戦況は正に厳しくなった昭和20年(1945)4月県立角館中学校の講師を嘱託された。勤務したのは翌年1月までと単年度内のことであったらしいが、その深い知識と個性的な指導とは、他の教師から習うのとは異なる影響を生徒に与えた。多分親の故郷の地への疎開少年であったものと考えられる高井有一が、『雪の涯の風葬』に印象深い姿を描写していることは地元でも知られている。彼の講師勤務中に敗戦の日は来た。

敗戦になっても、もともと「我亦宇宙の破片なり」という哲理のもとに生きていたと聞く彼のことであるから、撓むことなく研究と報告とは続くことになる。「天保飢饉越米資料」を発表する。昭和22年『秋田農民一揆史』を、翌年『秋田キリシタン史』をというように、戦後の時代性をも反映した業績を次々に発表し、学界からも高く評価され、歴史学者武藤鉄城の名は一層広く知られるようになった。初めて読んだ武藤鉄城著作はこのキリシタン史であった。考古学者としても25年10月に第5回人類学民俗学協会連合総会という全国学会で「有刃石器の刃の構造と機能」という意欲的な研究発表で注目されたのなどは、その一例である。27年には『袖野石器時代組石群発掘報告』を刊行する。

当然県内でも高く評価される存在で、昭和26年秋田県文化財専門委員に就任して指導性を発揮する。民放も開業し業務を展開する中で、各局のラジオで自在に行う放送活動は数え切れない程であ

った。昭和29年6月には若い日以来の投稿など縁の深かった秋田魁新報八十周年記念の「魁文化功績賞」を授けられた。むべなる哉である。同じ年にスポーツマン武藤鉄城の真の姿を示す「秋田県スポーツ(功労)賞」も受けた。さもありなんである。印象深い話題もある。文化庁にも勤務し、国立歴史民俗博物館の部長教授を長く務め、秋田県文化財行政にも関係深い岡田茂弘東北歴史博物館長は、昭和49年以来一緒に弘田柵調査事務所顧問の任にあるなど、会議の席もよく共にするが、館話で武藤鉄城を扱うと話したら、即座に「ああ、あの鮭石の」と応じ、昭和30年5月に第15回日本考古学会で「秋田県下の魚形刻石」という研究発表をし、秋田の鮭石(魚形紋刻石)を世界に知らしめた人物のことを、若い考古学徒として認識していた事実を表明したのである。それほど考古学界の注視を受けたこの発表は、母校慶応大学の一番教室を会場に行われたという。本人にとっても思入れの深いものであったと考えられる。

ところが昭和31年(1956)に「物好庵武藤鉄城投稿と著書およびラジオ放送目録」なる業績整理中の5月に発病、入院することになった。物好庵は、学生時代の蟻地獄と共によく知られている角館時代の筆名である。病床においても仕事は続行された筈であるが、8月20日に逝去した。この日の午前見舞に訪れた奈良環之助に「熊の奴しつこくって」と笑って言ったというのに、午後4時に水を少し飲んで眠りに就き、そのまま眼を開かなかったというのである。61歳であった。自身では発病の前にマタギの人々と食べた熊肉の食当たりと考えていたが、実は直腸癌だったのである。

ちょうど角館は盆踊の夜の賑わいの中だった。映画俳優高田稔の従弟で、著名な『角館志』も彼が提案者だったと聞く、この無限の文化人は、相応しい文化葬で送られたのである。

小松耕輔

明治17年(1884)12月14日由利郡玉米村館合に父平蔵・母トミの次男として生まれた。長男耕造は2年前に生まれ2ヶ月で亡くなったので、事実上彼は長男であった。今年の先覚館話の掉尾を飾るのに、おそらく県人唯一の「昭和天皇の学校の先

生」であるこの人は、ふさわしいと考える。自ら『わが思い出の楽壇』に「できるならば、林間に掘建小屋でも建てて、老後陰栖したい」と疎開帰郷中の日記に秋田県人そのものの心情を書く日本音楽教育の父なのである。また『秋田の先覚』4には親しい関係にあったと認められる筆者が「郷党ひとしく彼を歓迎し、彼もまた余生をこの地にとり考え」(菊地三男)と記すのにも心惹かれる。

増田村農業東海林重太郎の三男に生まれた父は、実の叔母らしい戸籍に商業とある玉米の養母のもとで、明治8年(1875)21歳で16歳のトミと結婚した。トミは矢嶋町田中町土屋直四郎長女であった。明治24年(1891)4月館合尋常小学校に入学した耕輔は、26年父平蔵が郡会議員になり、後には玉米村長も勤める状況の中で、27年母の実家から矢嶋小学校の高等科に通学するようになり、ここの教科の授業で洋式の音楽に接した。文学にも親しみ「玉米八景唱歌」はこの頃の彼の作で、長く歌い継がれたという。31年に卒業し手風琴を愛した。

明治34年(1901)2月親を説得許可を得て上京し、6月東京音楽学校選科に入学、神田の塾で英語・漢文を学び受験に備え、翌年9月東京音楽学校予科に入学、36年9月本科に進む。在学中東京帝国大学聴講生として心理学や美学を学び、『秋田の先覚』には「鉄扇を持った根本通明の身にしむ『易学』の名講義なども学んでいる」とある。通明の退職は38年7月14日なので、その可能性はあろう。39年に歌劇研究の「楽苑会」を組織し、6月第1回公演会で有名になった自作の「羽衣」を発表、7月に卒業し9月研究科に入りピアノ専修。9月3日学習院講師嘱託となった。

明治40年(1907)3月帝国音楽会を組織し理事就任。20歳代前半の覇気が見える。4月の楽苑会公演会では「霊鐘」を発表、柴田(三浦)環が歌唱する筈だったが果たさなかった。「羽衣」の序で文豪鷗外が「小松氏は、詩と楽との調和をもて畢生の業とせんと志し」と評した新進の地位は高まり、10月末本郷区湯島に転居した。彼の業は浅草オペラの訳詞や芸術座の作曲に迄及び、翌41年には1月号から「音楽界」の編輯主事になり、4月には学習院初等科に入られた皇孫殿下迪宮の唱歌科担任の先生になり、6月11日学習院助教授になる。

乃木希典学習院長は、よく唱歌の時間を参観して、4年生の殿下が楠正成の歌を唱われた時には眼頭を熱くしていたのを小松は見、院長は小松から唱歌の本を借り書きこみをして返却したこともあった。5年から本譜、6年ではレコードの音楽教育をして助教授は院長の意を生かしたという。

42年9月東京音楽学校研究科ピアノ科を修了、この年「名曲新集」を出版、翌43年には音楽教育会が設立され理事となった。一方では4月から東京外国語学校の独乙語専科（夜間）に入学精進した。4月2日四日市出身本多盛嘉妹ひろと結婚し、届出は6月6日に受付されており、確かに盛嘉妹だが父は勝平・母はみねで、明治20年1月10日生まれの東京音楽学校の卒業生である。恩師東大卒の詩人歌人である武島羽衣の媒酌によった結婚だという。戸籍では当時父から兄に戸主が代っていたのであろう。この年「複音唱歌集」を刊行、彼の出版意欲も旺んである。44年(1911)には梁田貞の曲である歌曲「隅田川」に歌詞を附した。彼の文学性の發揮例である。翌45年1月には喜歌劇「収穫」を作曲した。7月月号は大正に変わり乃木大将は殉死する。9月22日に「乃木大将の歌」を作曲出版した。心情はよく理解できる。

大正2年(1913)南満州鉄道会社の招聘があり夏に満州旅行をした。東儀哲三郎・大和田愛羅・船橋栄吉の3人との旅であった。東儀は学生時代からの活動仲間のヴァイオリニストであり、明治17年生まれの同年でユンケルに師事した。東儀氏は伝統の宮中雅楽の家で、父の死後も祖父清彰のもと宮内省雅楽部で修業した後、東京音楽学校に入り卒業後母校で教鞭を執り、大正10年には宝塚音楽学校の指導に当たる人物である。4人は大陸の雄大さに打たれて帰国したといわれているが、この年「御詠唱歌集」を出版する。そして翌3年勲八等瑞宝章を受ける。この頃既に親は五人の彼の弟妹を引連れて彼の許で暮らしていた。新婚3年でこの家族生活になった上に、「折目正しい」と表現されている姑のもとで、自ら1男3女の母であり、女子高等師範学校附属高女に勤務していたひろ夫人の苦労も推察に難くはない。

4年(1915)4月に小松・東儀・大和田が発起人となり「音楽普及会」を発足、30回に及ぶ音楽会

を催し、秋田・能代・大館・小坂などでも公演した。8月「大正幼年唱歌集」を出版、なお延長上の「大正少年唱歌集」は8年から出版される。学習意欲は弱化することはなく、5年4月外語の専科仏語専修に入学する。10年には「立太子礼奉祝歌」を作曲した。皇太子は教え子であったのだ。大正9年(1920)4月勲七等に叙され、5月には外遊が決まり、23日「小松耕輔渡欧送別音楽会」が帝国劇場で開かれ、水野錬太郎も賛助員に名を連ねた。9月19日学習院現職のまま出発、11月8日パリ到着、12月国立音楽院入学聴講、作曲・和声楽を学んだ。10年には独・奥・伊・西・英・米各国を視察し成果を上げて12年(1923)3月には数え年40歳で帰朝した。だが留学中に弟ヴァイオリニストの三樹三が仙台で演奏旅行中死去し、父平蔵も世を去っていた。淋しいこともある帰国であった。帰国した年の初秋に関東大震災がある。

東多摩郡杉並村阿佐ヶ谷に11月新宅を得て転住し、児童に歌われる「帝都復興の歌」を作曲し、13年学習院教授に昇任して外遊の成果も次々に発表。14年勲六等に昇叙、彼が編輯主任の『西洋音楽講座』8巻も豪華に出版。昭和2年(1927)には「国民音楽協会」を組織その理事長となった。音楽界の重鎮としての活躍が続く。

昭和4年学習院講師となる。合唱コンクールをラジオ放送によるコンクールに発展せしめる基礎を形成するし、昭和5年(1930)社団法人「大日本作家協会」の総務理事になり、翌年には田村虎藏・福井直秋と共著で『童謡唱歌名曲全集』(8冊)などを出版、7年には『昭和幼年唱歌』(4冊)『昭和少年唱歌』(4冊)が世に問われる。昭和11年には『西洋音楽史要綱』が刊行され、12年6月東京女子高等師範学校教授になる。ちょうど日独合作映画として宣伝された原節子・小杉勇・早川雪洲などが出演の「新しき土」が上映された年になる。当然唱歌教育も時局を反映することになったことであろう。昭和13年(1938)勲五等に叙される。

15年4月日本大学教授になり、5月国民学校教科書編輯委員に任命され、軍部と対立しつつ名曲の教材採択に努力したが、7月には『日本愛国唱歌集』を出し、時局認識をも示した。戦時生活の深刻化は女高師での生活を忙しいものにする。19

年(1944)勲四等に叙されたが、日記には防空宿直・音楽挺身隊東京連合演習・学徒動員で女高师生徒監督などの語が頻出する。そして20年元日は、B292機の上野方面に焼夷弾投下被害もあった中を親戚の者が年賀に来訪したことから始まる。2日は「還暦の第二日目」とあり、5日は「女高師に行く。午後露木次男年賀のため来たる」と書く、来訪の音楽家は、由利高・秋田大・聖霊短大などで教えた人である。3月14日近頃眼が一層悪くなったと記し、「夜女高師の同僚、内藤・金子・豊田の三君来たり、会食す」と書く。「豊田」の名には関心がある。昭和22年(1947)9月東北帝国大学教授に就任の豊田武教授ではないかと思うからである。昭和14年1月女高師の講師になり、9月助教授、16年11月30日応召、12月4日教授昇任、30日召集解除、女高師では19年・20年勤労働員の監督などに奔走していた。豊田教授仙台来任時学生として受講し、昭和25年から秋田に赴任するまで教授のもとで助手を勤めた者にとって、3月14日にこの館話の主人公と恩師が会食したとすれば、感慨深い史実である。そしてこの日には「いっそ退職して疎開して静養しようかとも思い、校長に相談したが賛成せず」との記述もあり、眼のことを思い煩っていた。

4月13日女高師も被弾、焼失箇所が生ずる被害を受ける。そして25日に「眼疾の安静治療を要するをもって向後三箇月欠勤する許可を得た」とあり、26日に「この日、秋田県玉米の郷里に帰り暫く静養することに決心した。郷里には私の生まれた古い家も残っているし、現在の当主小松栄男からも帰郷して静養するようにとの手紙をもらっていた」とある。29日晴の天長節にお召があつて10時参内したが、警報で拝謁はとりやめ午餐を賜ったとあり、「午後十時頃家を出て上野駅に行き夜を明した。同行は広子、久子、平五郎等」と記し、疎開する人で駅は大混雑だとも書いている。久子は三女で一行は朝5時10分上野発、福島乗換え午後10時横手着。駅前(平源あたりか)に泊った。翌1日横荘線で10時半老方駅着。10町ほどで「小松栄男(現玉米村長)の家に旅装をとく」とある。小松村長の下で助役は平五郎であり、その郷里に彼は錦を飾った形でさえあった。だから冒頭引用の心境になるのであろう。

だが8月15日終戦、結局21年に帰京毎日新聞コンクール顧問をはじめ、軍国主義を脱した中央の音楽界でこの大御所は不可欠であった。大家の自発的心情を敢て推察すれば、皇太子の音楽教育全般に関する任務を担ったことが、全日本合唱連盟理事長・教育音楽協会長・文部省教員検定委員などの諸要務よりも、遙かに優先していたに違いない。若い時の昭和天皇との日々を想起する筈だからである。昭和24年(1949)大学設置審議会専門委員で郷里の秋田大学にと思った特設音楽科が山形大学になった無念などを味わいながら、26年3月お茶の水女子大学教授となり翌年3月まで勤め退官。11月東洋音楽短大講師になる。仕事を続け、著書も生涯47冊にのぼる。充実した生活の中33年9月15日48年間睦み合った夫人が数え年71歳で世を去った。手箱の中の手記を『広子日記』とし関係者に頒布し、11月3日紫綬褒章を受け「広子が生きていたら」と嘆じたと『秋田の先覚』にある。

昭和40年(1965)暮の29日に音楽学校2年後輩の山田耕筰が死去、1月11日の葬儀には風邪気味で末弟(七男)清を代理出席させた。だが41年元旦には「今年は八十二両親より長命である。健康である。上々吉」と書いた彼は翌日洋服新調の発注をした。なのに2月3日脳梗塞により家族の看護空しく朝7時15分逝去した。秋田県立博物館には、大分市出身明治36年10月20日父建造・母カ子(ネ)二女に生まれた安部秋子と昭和38年に結婚した記録(平成6年8月29日阿部東由利町長発行戸籍資料)も所蔵されているから、看病の家族の中にこの人もいたのであろう。

従四位勲三等旭日小授章を授けられた。天皇皇太子の御使者はじめ、皇族や音楽関係者多数参列の葬儀は、2月6日に行われ、文京区本郷喜福寺の玉米から移された累代の墓に葬られた。またこの年の元旦の日記に「眼耳とにかく用を弁ず、手足不自由なし。他人にうらまれることなし。うらむことなし」と書いていたことを紹介して、「音楽教育の父」と謳われた先覚の館話で、実施報告を結ぶこととする。